



三田 RC の安行英文会員を講師とする地区の《宗教史からみた寛容と予定説》というセミナーを先日受講したので、私見を交えながら紹介させていただきます。

講師はロータリーの寛容について先ずロータリーの歴史から説明がありました。

ロータリーの最初の危機は、1907 年からの「親睦か奉仕か」を巡る論争です。ロータリーは、最初は会員相互の親睦と事業の発展を願った集まりでしたが、ロータリーが発展するにつれ、《親睦》と《奉仕拡大》について激しい論争がクラブ分裂の危機を迎えました。この危機は、歌を歌う習慣と全米ロータリークラブ連合会が設立により解消されました。

第 2 の危機は、1915 年からの奉仕活動の実践を巡る論争です。1916 年のガイ・ガンディガーの「ロータリー通解」発表後、次に、職業奉仕と社会奉仕の実践活動を巡る対立が起きました。これは、1923 年、決議 23-34 号の採択により、職業奉仕理念をロータリー哲学に置くことを前提としながら、一定の枠を設けてクラブの奉仕活動を認めることでロータリーの分裂を回避しました。現在に続くこれらの葛藤はいずれも「ロータリーの寛容」によって調和されて行き、今日のロータリーとなりました。

次に「ロータリーの寛容」の歴史とそれに最も影響したプロテスタントの職業観を見ていきます。

「ポール・ハリスの寛容」について、「ロータリーの私の道」では「ロータリーが、事業と専門職務に携わる人の間に世界的な親睦をつくることができたのは、寛容の精神の御蔭ですが、この寛容の精神を以てすれば、世の中に不可能なことは無くなるでしょう」と書かれています。そして、P. ハリスは、合理的ロータリアニズムを唱え、ロータリークラブの会員について、最初から「多様性」を認めていました。また、高い倫理水準を以て『寛容』を考え、反省し、それを表現しようと述べています。

ポール・ハリスは 1868 年に生まれ、ニューイングランドで、祖父母に育てられました。

ニューイングランドは、1620 年に宗教的迫害からイギリスから逃れて来たメイフラワー号のピルグリムを祖先とし、その影響が強い処です。ピューリタンは、この地で、清教徒の地縁血縁の『閉ざされた社会』という「不寛容」を以て再出発しましたが、様々な葛藤を経て、自由意志による契約社会という「寛容」へと変貌して行きました。そして、ここで育まれた「寛容」こそが、ポール・ハリスを通してロータリーの寛容に発展する源となります。

「寛容」は、宗教革命から起こった近代的概念です。当時は、すべての宗教は自分が正しいとする「不寛容」なものでしたが、宗教の力が弱くなってから「寛容思想」が発達し、自分と違う人々を寛容に扱うようになり、徐々に一つの価値体系の中に他者を位置づける『体制としての寛容』が浸透して行きました。

これにより、「寛容」は、「全体を勘案して、権利の自己抑制や処罰を慎むこと」、「悪に対する態度であり、是認しなくても許容することであり、また、より巨悪を防ぐ為の手段」となりました。やがて、「寛容」が徐々に浸透し、信仰や家柄や身分と無関係に居住者は公民の資格を得るようになりました。ピューリタンの「良心論」は、カトリックの「決疑論」を重視した為、「寛容」についても時代を経て、現代の寛容へと変容して行きました。

次に、マックス・ウェーバーの1905年の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に従い、「ロータリーの寛容」に影響を与えた「資本主義精神」について考察します。このプロテスタントの倫理から生まれた資本主義精神こそ、ポール・ハリスを通してロータリーの寛容や職業奉仕の理念に発展していく源であると考えられます。

即ち、ウェーバーは、「資本主義精神」とは、『①労働それ自体を尊重する。②目的合理性的精神 ③中世には犯罪とされていた利潤・利子を倫理・正当化すること』であり、この精神は、「職業」を「天職」と見做し、行動的禁欲（一つの目的達成の為に全身全霊を集中的に注ぎ込むこと）を以て職業に専念することにより、伝統主義を打破したと唱えました。

これにより、「基督教の根本教義」は、「隣人愛」を重視する故に、経済活動も肯定され、隣人愛の実践として行われなければならないと変容しました。

厳格なカルヴァン主義は、基督教の倫理である「予定説」を採り、利潤追求に公然と反対を唱えますが、これが逆に近代資本主義の芽生えとなっていきました。

「予定説」とは、仏教の因果律と対象的で、救済は信仰や善行より神の自由な恩恵と愛に基づくものであるとする説で常に緊張を孕んでいました。予定説では、神が救済する者は常日頃絶対的に正しいこと以外はやらないとされるので、これが逆に多大な努力を要求し、全生活を規制するようになりました。そして、何が正しいかを考えると、古いしきたりや伝統を捨て、目的合理的な考え方にならざるを得ず、これが資本主義を生み出しました。

こうして、凶らずも資本主義の担い手となった行動的禁欲の主体であるカルヴァン派の中産的生産者は、①隣人たちが必要とする財貨や物を正常価格で販売すれば必ず売れる。②当然そこに利潤が生まれ、その利潤は隣人愛を実践したことの証明である。③隣人愛の実践として、仕事そのものの為に貢献しなければならないと考えるようになりました。

資本主義精神で2番目に重要なのは、「プロテスタントの労働それ自身が救済である」という「労働を尊ぶ精神」です。彼らは、「労働は神の命令」と考え、「人間の価値」は「労働」で決まると考えました。

資本主義精神で3番目に重要なのは「利子に対する考え」です。カルヴァンは、最初、利子を禁じましたが、隣人愛の精神から利子と利潤を正しい取引が行われる限りにおいて赦すようになりました。

以上を纏めれば、「ロータリーの寛容」は、ピューリタンの間で様々な葛藤を経て、調整され、育まれ、形成されて来た「寛容」が、「職業を天職」と考える資本主義精神の影響を帯びて形成されたものであり、やがて職業奉仕を根幹とするロータリーの理念へと発展することを見て来ました。

最後に、ロータリーの寛容は、これまで基督教の中で生まれたと述べて来ましたが、意外なことに、ロータリーが日本に伝わる以前の幕末の勤王の志士の思想や江戸時代に「商人道」という職業倫理を確立し、資本主義の精神を説いた石田梅岩の思想にも同様のことが見られると講師は指摘しています。

そして、ロータリーとは、RIを中心とするグローバル主義のイメージがありますが、実際は、世界に35000を超えるクラブが存在し、グローバルとローカルが「寛容の精神」で調和された世界であると云えましょう。